新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る
平成２７年度　業務報告書

１．　入館状況について

平成２７年度総入館者数　529,218 人（対前年度比　93.7%）

［総括］

リニューアル３年目を迎え、平成 27 年度は通年営業としては２年目となった。充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様サービスを第一に努めた。

入館者数は、リニューアルオープン効果が薄れてきた中で、529,218 人のお客様にお越しいただいた。前半は、団体客・個人客の減少や７月にオープンした仙台うみの杜水族館への観光客の流失などの影響により、８月末時点で対前年比 83.9%と大きく下回っていた。

９月は平成 21 年以来、６年ぶりに訪れた「秋の大型連休（９月 19 日（土）～9 月 23 日（水・祝）・シルバーウィーク）」により、９月は対前年度比 108.9%と単月で初めて前年度を上回ったものの、10 月、11 月はシルバーウィークの影響もあり、再度前年度を下回った。

12 月は、新潟市内の積雪が 30cm を超えた昨年度に比べ、積雪がなかったことにより対前年度比 148.5%と大きく上回った。12 月末時点で対前年対比 90.8%と８月末から約 7%改善された。

２月には佐渡沖で水揚げされたリュウグウノツカイの標本展示（２月９日（火）～11 日（木・祝））をしたところ、最終日の２月 11 日（木・祝）には、5,354 人ものお客様が来館された。これは、ゴールデンウィーク、海の日、お盆、シルバーウィークに次ぐ、今年度 11 番目の記録となった。２月としても、無料招待を行なった平成７年度を除けば、過去最高記録となった。

その他、冬場の集客対策として、成人の日企画「新成人及びその同行者の入館料免除」や「ハロウィン」「クリスマス」「バレンタイン」「ホワイトデー」でプレゼントを配付するなどのイベントを実施した。閑散期の実施であったが、僅かながらの入館者増が図れた。

最終的には対前年度比 93.7%と大きな落ち込みはなく、年間の入館者で見ても昨年度に引き続き、平成 11 年度の 667,844 人以来 500,000 人を超え、一定の水準は達成できたと考えている。

入館者数は、「休みの連なり方」や天候により左右されるが、今後も展示や企画内容・実施時期などに工夫を凝らすことで、入館者数の増加及び平準化に努めていきたい。

パスポート購入者は、平成 26 年度 7,969 人から平成 27 年度 10,087 人と約 2,000 人増加し、リニューアルオープンした平成 25 年度の 11,097 人に次ぐ購入者数となった。今年度は積極的に年間パスポートの宣伝し、特に館内出口付近には当日の入館券に追加料金をプラスすることで年間パスポートに切替ができるというポスター掲示やチラシを設置したことで、多くのお客様から年間パスポートへの切替をしていただいた。パスポート所持者の平均年間来館回数が１人あたり 5.7 回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳（対前年度比 99.3%）」「老人施設（対前年度比 91.8%）」「小・中学校（対前年度比 99.3%）」「保育園・幼稚園等（対前年度比 75.8%）」と減ってはいるものの、減免利用者総入館者数は、25,815 人と総入館者に占める減免利用者の割合は 4.9%となっており、当館の果たすべき社会的役割はますます大きくなっていると考えている。

毎月実施しているアンケート調査では、展示生物に対する満足度が 97%以上を確保しており、「楽しかっ

た。また来たい」「見やすくて良かった」「見せ方が素晴らしいと思いました」「魚などがとても近くで見れて良かった。施設も綺麗だった」「楽しく見学できる様考えていることがよく分かり、とても満足です」などの感想が寄せられている。レストランについても「接客が好印象」「笑顔で接してもらいました」などの声も寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

２．施設の管理運営状況について

（１）臨時開館・閉館及び開館時間の変更

［総括］

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

繁忙期における開館時間の繰り上げ・延長を行った日すべてが、年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

まず、ゴールデンウィークは５月３日～６日について開館時間を３０分繰り上げ、５月３日～5 日について閉館時間の１時間繰り延べを実施した。例年実施していることではあるが、県外及び帰省による入館者が増加し、水族館へのアクセス道路が大変混雑するため、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であった。

次に海の日とその前日である７月 19 日と 20 日及び7月 26 日～８月 23 日までの日曜日及び8月８日～15 日のお盆時期について、開館時間の３０分繰り上げ及び閉館時間の１時間繰り延べを実施した。例年のお客様の入館動向を把握し、適切な開館時間の繰り上げ・延長を実施し市民サービスのため目的を十分達成した。また、今年度は試験的に７月 25 日と８月１日と 22 日の土曜日に閉館時間を２時間繰り延べし午後７時まで開館した。初の試みで認知度が低かったこともあり十分な入館者増が図れなかったが、年間パスポート会員や仕事帰りのお客様等が多少は来館され、周知方法等、今後検討が必要と思われる。

また、平成 21 年以来６年ぶりに訪れたシルバーウィークでは９月 20 日～22 日について開館時間を 30 分繰り上げ、ゴールデンウィーク同様、入館者の時間帯ごとの平準化や、周辺道路の混雑緩和に有効であった。

例年１月２日・３日は、市民サービスのため臨時開館を実施している。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリンピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から込み合う。初詣客の入館促進を図り、正月開館も定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第 42 条に基づく電気設備法定点検を３月３日・4 日で実施した。従来からの休館日は「12 月 29 日から１月１日」と「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のため３月の第１木曜日とその翌日」しかなく、今後も工事スケジュールを組むことが困難となる場合がある。

今後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていくことが必要である。

（2） 展示生物の状況について

［総括］

協定書の仕様書に謳われている約 500 種、20,000 点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。世界初の成功例となったアカムツ（通称＝ノドグロ）の人工育成個体を#19 水槽に常設展示した。ホトケドジョウ、シナイモツゴを「信濃川水槽」に、クサガメ、アカハライモリ、タツノオトシゴ、ロクセンスズメダイ、シロウ、クロベンケイガニを「育成室」に展示した。「にいがたフィールド」で自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカ、トミヨ属淡水型（イバラトミヨ）、ギンブナ、トノサマガエルを観察会等で紹介した。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛け、1～2 ヶ月で内容を更新する特別展示を行った。

タイムリーな話題として、教育的配慮の下に、佐渡市の定置網で捕獲されたリュウグウノツカイを期間限定で標本展示した。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

（3）通年事業の実施状況について

［総括］

① ペンギン解説

ペンギン散歩道（夏期はペンギン海岸）でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ 15 分の解説時間の中で気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことに目的をおいている。

「イルカショー」では、ハンドウイルカ 2～3 頭、カマイルカ 1～2 頭を交代で用いて 1 日に 4～5 回、1 回約 20 分のイルカショーを行った。イルカの認知、行動能力などを解説し、楽しく学べるイルカショーを心がけた。多客期には 1 日の実施回数を増加し、より多くの来館者が快適にショーを楽しんでもらえるよう配慮した。毎回のイルカショー後には、イルカに関する疑問が解消できるよう質問受付を実施した。毎月実施しているアンケート調査では、概ね高評価を頂いている。

③ マリンサファリ給餌解説

主にオスのトドを用いて 1 日 2 回、およそ 10 分間の解説を実施した。体重 1 トン近い大型のオス

を直接コントロールして飛び込みなどをさせる園館は他にほとんどなく、来館者から大変好評を得ている。

④　ひれあし類解説

来館者の目の前にゴマフアザラシの幼獣をトレーナーが連れて行き解説する形で行っている。普段はマリンサファリ内にいる動物を間近で見られる機会は他になく、参加者の反応が良い。近づかなければ分からない体毛やロヒゲの質感など細部まで観察してもらい、より深い情報を提供できている。通常はマリンサファリ２F 観覧通路、荒天時や多客時はイルカ屋内プール観覧席前で実施している。

⑤　日本海大水槽解説

水生生物や海洋環境に関する知識の普及を目的に、日本海大水槽前で飼育員が解説を行った。参加者は大水槽前のベンチに腰掛けてゆったりと解説を聞くことができる。展示生物の紹介から水族館のしくみまで多角的な情報を伝えられた。

⑥　磯の生き物解説

磯の体験水槽で、生物を １ 日 １ 回、解説を交えながら近くで観察してもらう。生物の扱い方や、生息環境への理解を深めるのに有効であると実感している。

⑦　アクアラボ体験

アクアラボで水生生物に対する知識と理解を深めることを目的に、顕微鏡・カメラ・大型液晶モニターを用いて、観察や解説を行った。参加者の年齢に合わせて季節感を考慮した日替わりのテーマに沿って実施し、たいへん好評であった。

（４）　生物展示関係イベント等の実施状況について

［総括］

①　特別展示「シロウオ ～春を告げる魚～」

春になると産卵のために遡上し、新潟県では「いさざ」「しらす」と呼ばれ親しまれているシロウオを生体展示した。全国や新潟県内の分布状況、全国の遡上時期、館内での繁殖の取り組みなどをパネルで紹介した。シロウオと同様に通し回遊を行うサケの稚魚を合わせて紹介した。河川改修などにより全国的に減少傾向にある状況も紹介し、河川環境に対する意識を高めてもらう良い機会となった。

②　特別展示「海水魚と淡水魚 ～適応のしくみ～」

魚類には海水と淡水のどちらか一方にすむ種、どちらにもすめる種などがある。魚類の体液と環境水の浸透圧の違いや水分保持のしくみなどを水槽やパネルで展示し、わかりやすく解説した。魚類の水環境に対する適応のしくみについて理解してもらう良い機会となった。

③　特別展示「守ろう！新潟の希少淡水魚」

新潟県の様々な水辺環境には多種多様な淡水魚が生息しているが、水辺環境の急速な変化や国内外からの外来種により、普通に見られた種までもが希少な存在になっている現状を紹介した。生物や環境多

様性の大切さについて考えてもらう良い機会となった

④　特別展示「水中探査機で見た水深 100m の日本海」

2015 年９月にふくしま海洋科学館の協力を得て、アカムツやキダイ等が漁獲される水深 100mの海底環境と生物の生態を調べるために行なった遠隔操作型水中探査機による調査の結果を撮影映像で紹介した。カメラでしか捉えることのできない深度 100m の海底環境を理解してもらう良い機会となった。

⑤　特別展示：リュウグウノツカイ

平成 28 年２月８日に佐渡市黒姫の定置網で捕獲された全長 3.3m のリュウグウノツカイを展示した。本種を取り扱うのは平成 26 年 12 月に続いて２例目であったが、きわめて状態の良い標本で、多くの来館者に実物を見てもらう貴重な機会となった。

⑥　いきもの教室（自主事業）

※応募状況は別紙５のとおり

４月から３月まで、全 12 回のプログラムを計画し実施した。12 回は全て違うプログラムとし、対象年齢を小学生以上に設定した(4 月のみ小学３年生以上)。全 12 回の応募数は定員に対して 389.6%とH26 年度の 250%を大幅に更新した。特に応募者が多かったのは、６月の「調べてみようイルカのあれこれ」710%、８月の「貝の標本づくり」780%、11 月の「サメの解剖」815%、１月の「アシカトレーナー体験初級編」640%であった。

アンケート結果を見ると、参加者の満足度は非常に高く、94.9%の方が「とてもおもしろかった」「おもしろかった」と回答している。理解度を問う設問では「よく分かった」が 84.0%であった。対象年齢をひとつの学年に絞らないプログラムであるにも関わらず、このような高い理解度を得ることができたことは、プログラムデザインと実施のスキルについて長年の経験の蓄積があるためと考えられる。

⑦　にいがたフィールドガイド

にいがたフィールド（以下、フィールド）紹介と、そこで見られる動植物を解説する新規プログラムで、環境教育の機会とすることを目的に行った。

入館者を対象に１日１回約 15 分間のガイドとし、「水と土の芸術祭連携企画」の一つとして７月 23 日から８月 12 日の 21 日間、シルバーウイーク特別企画として９月 19 日から９月 23 日の５日間実施した。夏期の累計参加者数は 231 名、秋期の累計参加者数は 105 名であった。夏期では、暑さによる参加者の体調を気遣い，７月 28 日に日傘を準備し，８月８日にドライミスト装置をフィールドに設置した。

フィールドで見られる動植物の変化等を当館ホームページ、館内設置のモニターやガイドブックで情報発信しているが、当日に見られた動植物について職員が解説することで、フィールドの魅力をより知ってもらい、身近な水辺環境への関心を持ってもらう機会になったと考える。また、猛暑や雨天でも参加があったことから、入館者の期待にも応えるプログラムであったと感じた。

⑧　にいがたフィールド観察会

にいがたフィールド（以下、フィールド）紹介と、そこに生息する魚類を採集、解説する新規プログラムで、環境教育の機会とすることを目的に行った。

入館者を対象に１日１回約 30 分間のプログラムとし、８月８日・22 日・29 日の計３日間実施した。累計参加者数は 67 名であった。

フィールドを紹介しながら、ため池と砂丘湖へ事前に沈めておいた魚捕獲籠を回収し、それにより採集されたシナイモツゴ、ギンブナ等を観察してもらいながら解説した。また、魚捕獲籠では採集されないキタノメダカ、ホトケドジョウ、トミヨ属淡水型（イバラトミヨ）、トノサマガエルの幼体・成体についても、事前にプラケースに準備した生体を観察してもらいながら解説した。

参加者が採集するプログラムではなかったが、目の前で採集する様子や魚類等が見られたこともあり、参加者からは「貴重な体験をした」「生き物について勉強になった」「トノサマガエルのオタマジャクシからカエルまで、変態の過程が見れてよかった」「次回来たときはフィールドも見ます」「近所の川や田んぼへ行ってみます」などの感想をいただいた。

⑨　水族館写真教室

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館での楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することはとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について当館職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらえたと考えている。

⑩　ゴマフアザラシ愛称募集・命名式

３月 21 日に生まれたオスのゴマフアザラシの愛称を９月 12 日から 10 月４日に館内で募集した。3,408 通 2,118 種類の応募があり、館内で検討した結果「ホシ」に決定した。「ホシ」と記入してくださった 189 人の方から抽選で２名を代表として選出した。代表者を招待しての「命名式」を 10 月 31 日に実施し、記念品を贈呈した。

⑪　水族館裏側探検「イルカ編」

毎年行っているイルカ解説プログラムで、今年は飼育施設、骨格標本、生体等を見ながら飼育の裏側に重点を置いて解説を行った。応募は定員の 158%で、昨年より倍率は低下したが、依然人気が高いことがわかった。アンケートの結果を見ると、全員が「よくわかった」、「時間の長さはちょうどよい」と答えていて、こちらが意図した内容を概ね伝えられていて、参加者の満足度も高かったのではないかと思われた。

⑫　田んぼ体験

※応募状況は別紙５のとおり

リニューアルで造成した田んぼで田植えから稲刈り、脱穀までの稲作の体験を実施した。一昨年から数えて３回目の実施となる。当館の事前募集プログラムとしては唯一の４歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多かった。応募の動機なども「子供に体験させたかった」という保護者が多く、今後幼児向けのプログラムを充実させる必要があると感じた。

田植え、稲刈り、稲架がけ、脱穀と稲作の一連の流れを体験でき、またそこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

⑬　お泊まりナイトツアー（自主事業）

※応募状況は別紙５のとおり

リニューアル後としては初となる「大人の女性限定　お泊まりナイトツアー」を開催した。今回のイベントでは、広報や募集事務などを株式会社ニューズライン（Komachi WEB を運営）に委託して実施した。募集を主に Komachi WEB でおこない、対象を大人の女性のみと限定したが、定員 20 人のところ 205 人の応募があり、人気の企画であることが裏付けられた。

本イベントは夜間の安全管理など職員に負担が大きいイベントであるが、イベント実施に対する市民の期待度は高く、また参加者の満足度も高いことから、今後も不定期であるが実施を検討していく必要がある。

⑭　ナイトツアー（自主事業）

３月に４日間（各日定員 20 人×4 日間＝80 人、応募者多数のため定員を拡大して 99 人が参加）実施した。参加費が大人 2,000 円、小人 1,000 円と、当館のイベントの中では高額な部類に入る企画であるにもかかわらず、141 組 379 人の応募者があり、ナイトツアーの人気は依然高い。定番企画の１つとして続けてきた本プログラムであるが、リピーターにも飽きられることのないよう、毎年工夫し、水族館の魅力アップに役立てていきたい。

⑮　フォトコンテスト写真展

応募期間：７月１日～10 月 15 日（応募点数 280 点）

展示期間：12 月 11 日～1 月 31 日（展示点数 126 点）

昨年度に引き続き２回目の開催。募集期間を初夏から秋にかけてのオンシーズンとし、入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡っての話題づくりとなることを想定して実施した。昨年よりも応募点数が 100 点ちかく増加し、企画として認知されてきたと考えている。

⑯　大人のための水族館講座

水族館や水生生物についてより深く知ってもらう事で、水環境について考えてもらうきっかけとし、大人に対しての教育の機会とすることを目的に実施した。

昨年までは全て同じ参加者による複数回の連続講座としていたが、H27 年度は単発の講座とし、３回実施した。

１ 回目は当館館長による「館長トーク」、２ 回目は当館獣医による「水族館の獣医の仕事」として実施た。３ 回目は、特別展示「水中探査機で見た水深 100m の日本海」の関連イベントとして「講演会　日本海の生き物を調査する」を開催した。講演会では、国立研究開発法人水産総合研究センター日本海区水産研究所の研究員２名を講師として招聘し、それぞれサケ、アカムツの最新の研究知見について講演していただいた。

⑰　クリスマス飾りワークショップ

実施日：12 月 15 日（火）、16 日（水）

参加組数：15 日は 20 組、16 日は 34 組

クリスマスツリーの飾りを作るワークショップを 12 月の平日に開催した。冬期に増加する「幼児とその親」という組み合わせの来館者をターゲットしたプログラムとして「プラ板ぬり絵」を実施した。

⑱　ハンズオンガイド（自主事業）

実施日：2 月 20 日、21 日、27 日、28 日

参加者：15 人

ハンズオングッズの楽しみ方や設置の主旨を解説することで、実際の生物観察のポイントに気付いてもらう良い機会となった。

⑲　育成室ガイド（自主事業）

実施日：3 月 20 日、21 日、26 日、27 日

参加者：36 人

普段はガラス越しにしか見ることのできない育成室の内部を飼育員の案内で見学する。幼生や仔稚魚の育成の様子を間近で観察できる貴重な体験は、大変好評であった。

⑳　骨格標本ガイド（自主事業）

実施日：3 月 5 日、6 日、13 日、14 日

参加者：18 人

アクアラボのイルカの骨格標本、屋内プールの生体を観察しながら、鯨類の体のつくりについて解説する。骨格と生体を解説付きで観察することで、泳ぎ方など、イルカについて正確に知ってもらう良い機会となった。

（5）企画イベントの実施状況について

［総括］

①　ハロウィンイベント

10 月 29 日（木）から 11 月 1 日（日）まで，中学生以下で仮装してきた先着 100 名にお菓子詰め合わせを用意し、77 人にプレゼントした。また、10 月 31 日（土）と 11 月 1 日（日）には、キッズファン前の通路にペッパー（人型ロボット）を設置した。

②　子育て応援 Ustream 番組 nicotto 座談会

10 月 17 日（土）に 6 組の親子が参加し、会議室で座談会を行った。また、12 月 13 日（日）には 4 組の親子が参加し、「パパ」座談会を行った。

③　平成 28 年オリジナルカレンダープレゼント

毎年恒例のプレゼントとして、11 月 28 日から引換券を提示した先着 1,200 組へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

④　クリスマスツリー展示

11 月 21 日（土）から 12 月 28 日（月）の間、マリンピアホール（円柱水槽側）に高さ 4.5 メートルのクリスマスツリーを展示した。

⑤　クリスマスお菓子プレゼント

12 月 23 日（水・祝）から 25 日（金）の間、各日先着 100 人の中学生以下の入館者にお菓子をプレ

ゼントした。

⑥　門松展示

１月２日（土）から７日（木）の間、正面入口に門松を設置した。

⑦　バレンタインお菓子プレゼント及びオリジナルグッズプレゼント

２月 11 日（木・祝）から 14 日（日）の間、各日先着 100 組にお菓子、先着 200 組に抽選でオリジナルグッズをプレゼントした。

⑧　ホワイトデーオリジナルグッズプレゼント

３月 12 日（土）から 14 日（月）の間、各日先着２00 組に抽選でオリジナルグッズをプレゼントした。

（６）　専門的な調査・研究等について

［総括］

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表すると共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会種保存委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。状況に応じて、特定外来生物が生態系に与える影響や、絶滅が危惧されている希少種についての情報を積極的に発信している。

水族館技術者研究会で「キダイの人工授精と仔魚育成の試み」「飼育下におけるロクセンスズメダイの育成」について、研究成果を発表した。共に、世界初の研究成果となった。

アカテガニの国内初の飼育下繁殖に成功し、日本動物園水族館協会の繁殖表彰を受賞した。

キダイやアカムツ（ノドグロ）等が漁獲される水深 100mの海底環境と生物の生態を調べるため、ふくしま海洋科学館の協力を得て、遠隔操作型水中探査機（ROV）による共同調査を実施し、ROV で撮影した日本海の水深 100m の海底環境と生物について企画展、講演会で紹介した。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する上堰潟水生生物調査に協力し、潟の水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況も明らかにした。

漂着生物調査で、胎内市に死亡漂着した鯨類調査を行い、本種をザトウクジラと同定した。日本鯨類研究所海棲哺乳類ストランディングデータベースにおいて、新潟県初の記録となった。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

（7） 総合学習等の受け入れ状況について

［総括］

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子供たちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めることを目的とした職場訪問といった目的の総合学習にも対応している。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や感想が寄せられている。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

（8） 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

［総括］

実習生等の受け入れとして、大学生および専門学校生を対象に「インターンシップ」「飼育実習・研修」「獣医実習」「博物館実習」を行った。これは、博物館類似施設としての一面を持つ水族館として、大学生・専門学校生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていきたい。

また、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。内容は、大きく分けて「野外での観察等の指導」と「教室（屋内）での生物や仕事についての講義・指導」であるが、対象が小学生から一般と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

毎年度継続して実施している臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたい。

小中学校への講師派遣は、中学校への職業講話が２校であった。本年度は、まちなかキャンパス長岡からの依頼で、一般向けの講座「サイエンスカフェ」へ講師を派遣した。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と地域・社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

（9） 市民ボランティアの活動の状況について

［総括］

ボランティア活動の目的を大きく「水族館（専門家）と来館者（非専門家）をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の３つとして活動をサポート、コーディネートした。平成 27 年度は５月に新規募集をおこなった。新たに 17 人のボランティアを迎え、総勢 87 人となった。活動状況は活動日数 251 日、活動延べ人数 742 人であった。昨年度よりも活動日数（196 日）、延べ人数（508 人）ともに大きく増えた。

平成 27 年度の活動の柱として「館内案内」「いきもの教室の補助」「アンケート調査」「研修」「磯の体験水槽解説のスタート」を設定して実施した。特に「磯の体験水槽解説」は生き物ガイドとして初めて取

り組む活動であるため、２回の研修後に解説実技の試験を実施して認定制とした。

今後とも、水族館、来館者、ボランティアの３者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

（１０）　広報および広告宣伝について

［総括］

平成 27 年度の広報および広告宣伝について、前半（4 月から９月くらいまで）は県外への広報、秋以降は県内への広報を重点的に行った。

①　テレビ CM とラジオ CM

テレビ CM は、H26 年度の CM を引き続き放映したが、夏前と春前に新バージョンの CM を制作した。３月から放送する新バージョンは「年間パスポートがお得」という情報に特化したものを製作した。

ラジオ CM は、H26 年度と同様に FM 新潟、ＦＭポート、FM 山形、FM 福島、FM 善光寺で放送したが、FM 群馬と文化放送は実施しなかった。また、年間を通して毎週火曜日夕方の FM にいがた「サウンドスプラッシュ」内で職員が生出演して旬な情報を提供した。

②　雑誌などの紙媒体への広告

雑誌などの紙媒体への広告は昨年度実績をベースにしつつ、効果的にリニューアルをアピールできる媒体を取捨選択して掲載した。

③　WEB

「Google インドアビュー」を 12 月よりアップした。また、ホームページ内の館内案内図を更新し、展示生物やゾーンを分かりやすくした。SNS への取り組みとして、これまで実施してきた Twitter 以外に LINE@と Facebook を 11 月より本格運用を開始した。

④　広報・プレスリリース

ここでは、プレスリリースの他、いわゆる「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」と位置づけることとする。平成 27 年度は H26 年度にくらべてプレスリリースの回数を多くしたため、取材が多くあった。また、「イルカ捕獲禁止問題」「リュウグウノツカイ展示」「飼育ラッコの減少」など、ニュース性のある話題が年間を通してあったため、在京メディアからの取材も多くあった。

（１１）　他園館との協力について

［総括］

のとじま臨海公園水族館、ふくしま海洋科学館、いなわしろカワセミ水族館から、魚類等の生物交換にご協力いただいた。のとじま臨海公園水族館においては、魚類等の収集に際し、現地採集の機会をいただき、現地作業にも協力いただくなど、便宜を図っていただいた。

国内飼育ペンギンの遺伝的多様性への寄与として、27 年 4 月に札幌市円山動物園へフンボルトペンギン 1 羽をブリーディングローンで貸出した。哺乳動物の繁殖促進、ペンギンの遺伝的多様性の維持を目的とした桂浜水族館との生物交換で、28 年 1 月にトド仔 1 頭を搬出、フンボルトペンギン 1 ペアを搬入した。

飼育技術向上への協力として、27 年 12 月に桂浜水族館から依頼のあった鰭脚類飼育研修、28 年 2 月に上野動物園から依頼のあった鰭脚類健康管理トレーニング研修を当館で行った。

（１２） 年間入館パスポートについて

［総括］

平成 27 年度の年間パスポートの購入者は、10,087 人（総入館者の 1.9%）、パスポート利用者（購入者＋リピーター）は 57,073 人（総入館者の 10.8%）となった。また、パスポート利用者の平均入館回数は 5.7 回であった。（別紙 1-2）

購入者数は、平成 26 年度の 7,969 人から約 2,000 人増加し、リニューアルオープンした平成 25 年度の 11,097 人に次ぐ購入者数となった。また、パスポート利用者も平成 26 年度から約 4,000 人増加している。館内外で積極的に広報したことが増加に繋がったと考えられるが、特に顕著だったのが 2 月のリュウグウノツカイの標本展示を行なった最終日の 2 月 11 日（木・祝）に、1 日で 329 人もの購入者があった。これはリニューアルオープン初日の 436 人に次ぐ 2 番目の記録であった。リュウグウノツカイの標本展示が来館のきっかけとなり、多くの市民にとって年間パスポートへの需要が潜在的にあることが伺えた。今後もリュウグウノツカイのような話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員が繰り返し来館していただくことが入館者増に繋がると考えられる。

アンケート調査での「生物の変化を発見できたか」との問いに対して、57.5%の人が「発見できた」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行ったことが評価されたと考えている。他にも「これからもたくさん来たいと思います」や「楽しく過ごせました」や「子供が大好きでよく来ています」などの声もいただいている。

また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が 2.5%で、85.8%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

（１３） 市・他団体等との協力

［総括］

平成２７年度に行政や他団体等と協力して実施した事業は以下のとおりである。

リニューアル後も水族館にとっては、集客力アップのため、他施設・他団体との協力が不可欠であり、指定管理者だけではなしえなかったサービスを展開できたと考えている。多くのお客様から楽しんでもらい、満足してもらえたと思う。

今後も、積極的に機会をとらえ、他団体や民間の持つ多様なチャンネルを活かした事業に組んでいきたいと考えている。

① （財）新潟観光コンベンション協会「ＳＬばんえつ物語号」クーポン入館料割引

「ＳＬばんえつ物語号」に乗車した人に配付されるクーポン券を持って来た入館者に対して入館料の割引を行うという企画で、「ＳＬばんえつ物語号」に乗車し、新潟での観光を楽しもうという人からマリンピア日本海へ来館してもらえた。

② NEXCO「新潟・北信濃・会津　週末フリーパス」利用者への入館料割引

ETC 車限定の新潟県内及び長野県北信濃地方・福島県会津地方のエリア内で、休日を少なくとも 1 日含む連続する 2 日間が高速道路乗り降り自由という内容で、申し込み画面を提示すると優待施設で割引のサービスが受けられるという企画に参加し、新潟の観光促進と入館促進が図られた。

②　水と土の芸術祭 2015 ガイドブック等提示による入館料割引

第３回目の開催となった「水と土の芸術祭 2015」開催期間におけるガイドブック等の提示者に対して入館料の割引を行い、ガイドブック等持参者が来館し、口コミ等で魅力を伝えることで入館促進が図られた。

３．入館料収入の実績について

平成２７年度入館料収入　　４７８，９７９，０３８円

［総括］

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

平成 27 年度は前半の一般客、団体客の減少、また７月にオープンした仙台うみの杜水族館の影響を受け入館者数（平成 27 年度 529,218 人、平成 26 年度 564,629 人）が昨年度を下回ったことに伴い、入館料収入も 478,979,038 円（平成 26 年度 518,016,218 円、39,037,180 円減、対前年度比 92.5%）と減少した。また、客単価は 905 円であった。入館料収入で見ると平成 21 年度の 472,223,438 円と同等の水準であったが、当時の入館者数が 489,113 人、客単価 965 円からすると一般客、団体客の減少が大きく影響したことが考えられる。

収入増対策としてゴールデンウィーク前に、9 月末まで利用できるクーポン券付折込チラシ（提示で 1 組全員２割引）を新潟市外県内、山形、福島、長野、群馬、宮城に発行した。発行実績のあった同チラシを、リニューアル後の入館動向を見ながら初めて発行した。入館動向を期間中、3,888 組 12,363 人のお客様に来館していただき、12,087,680 円の収入があり、観光客の来館動機付けに一定の効果があったと考えられる。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」はクーポン券付折込チラシと異なり割引がないため、その影響により平成 26 年度 11,679 枚から 7,844 枚と減少した。同じくリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで２割引となる「JAF カード割引」は 24,600 人のお客様が来館した。

９月以降の閑散期に向け３月末までの期間で、市内小学校へ割引券付チラシや隣県及び新潟県内の幼稚園、保育園へ割引券付のフリーペーパーを発行した。期間中 2,733 人のお客様に来館していただき 2,222,980 円の入館料収入があり、入館者数が減少する閑散期に入館料収入の増加が図れたと考えている。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、老人施設、福祉施設などが増え、質量ともに負担のかかる業務になることが予想されるが、団体休憩室の予約など状況を把握し不備のないよう行っていきたい。

４．管理経費等の収支決算について

［総括］

海水取水設備において、近年の取水先端部海底面の上昇により、取水口付近の着砂が進行し、取水口の埋没が疑われる現象が生じている。昨年度末には平成２年の開館以来、初めて取水配管が全閉塞する事態が発生した。今後も同様の事態が発生する恐れがあることから、早急な対応が必要となった。施工業者と打合せを行なった結果、取水先端部を 60cm 嵩上げすることとなり、８月に工事を行い 2,214,000 円の経費を要した。これは、緊急対策として行なった工事であり、近年の着砂状況から推測すると数年の措置である。その他、将来の恒久対策に向けて水深、水質などの事前簡易調査を行ない 1,512,000 の経費を要した。取水先端部 60cm 嵩上げを行ったことで人的排砂作業は行なわずに済んだが、冬季の海水着水槽の植物片の流入により１回のみ大型吸引車を使い、除去作業を行なった。これについても汚泥処分費を含め 1,450,440 円の経費を要した。

この一連の取水設備業務で約 5,200 千円の経費を要したこと、人事異動などにより経費が嵩んだことで決算見込みが当初予算より約 6,000 千円不足することとなった。このため年度途中で指定管理料の増額の変更契約を締結した。

例年経費が嵩む工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所で不具合が依然として発生しており、その都度修繕工事を行ってきた。しかし、夏場の最大電力を抑えるため設備の運転時間を間欠したり、空調の設定温度を下げるなど、光熱水費の節約を積極的に行なったことでこれらをまかなうことが出来た。その他にも周辺道路・駐車場の警備員を実態に合った配置を行なったり、特別展の会場設営を出来るだけ自前で行うなど経費節減に努めた。

また、平成 27 年度末に活魚輸送車を導入した。従来は魚類購入の際、業者に依頼し運搬してもらっていたため、輸送費に相当な経費がかかっていた。平成 28 年度以降は業者に依頼することなく自前で魚類を運搬することが出来ることから、魚類購入に関しては経費削減が期待できる。

最初に述べた取水設備では、平成 27 年度に取水口先端 60cm 嵩上げを行い、平成 28 年度には恒久対策に向けた調査費・設計費の予算が措置されている。しかし、恒久対策が完了するまでは、今後も取水先端部の海底面上昇によりトラブルが発生することが予想される。また、工事についても、依然としてリニューアル未着手箇所での不具合による修繕工事費が嵩むことが予想されることから、平成 28 年度大規模修繕が発生した場合は、市と相談しながら行っていきたい。

5．　自己評価に関する事項について

6．　最後に

平成 27 年度の入館者数は、529,218 人（対前年度比 93.7%）、入館料収入は、478,979,038 円（対前年度比 92.5%）と、平成 26 年度と比べ共に減少し、また、事業計画書で掲げた目標値 598,000 人にも及ばなかった。リニューアル効果が薄れ年々減少することは一般的な傾向ではあるが、入館者数では、平成 26 年度に続き平成 11 年以来 500,000 人を超えた。入館収入では入館者数 489,113 人であった平成 21 年とほぼ同じ水準であった。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が 97.7%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が 94.9%とリニューアルオープン３年目を迎えた平成 27 年度も満足度は高水準を保っている。

また、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 49.8%（前年度 53.8%）と昨年度よりは減ってはいるものの、アンケートをとった約半数のお客様が初めての来館であり、市内を含めまだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。逆に、「2 回目」「3 回目」「4 回以上」がそれぞれ 30%を下回っていることから、また来たいと思えるような施設づくりを心がけ、いつも来ても新鮮味のある展示に努めたい。このことが、年間パスポート購入者の増加に繋がると同時に、リピーターとして来館していただくことでの入館者数増にも繋がると考えている。

施設については、リニューアル工事の対象外であった箇所で突発的な不具合が依然として生じており、今後も十分考えられることから、工事未着手の箇所は注意深く維持管理すると共に、リニューアル工事を行なった箇所についても設計会社が提案した修繕計画に基づき新潟市と相談し、不具合による事故が起こらないよう努めたい。

また、駐車場は、臨時駐車場として使用していた水族館脇の土地を整備し 56 台増設し、平成 28 年 3 月より共用を開始した。水族館からは最も近い駐車場でお客様にとっては非常に利便性が高く、繁忙期の当該駐車場への回転が良くなることで、従来の駐車場不足がどこまで解消されるか期待したい。海岸側臨時駐車場（ブロックヤード）の管理については、「みなとトンネル」開通後、水族館のお客様以外の駐車車両が一層増加し、いつ事故が発生しても不思議ではない状況だが、海岸保全区域内の公有財産を使用承認を受けて活用している土地であり、指定管理者単独による管理は非常に困難になってきている。とくに、海岸側臨時駐車場からの道路の横断について、交通信号がなくお客様の安全が確保できないことが懸念されることから引き続き市や警察に働きかけていく必要がある。

水族館を運営する上で大きな問題として、取水設備がある。管理経費等の収支決算でも述べたが、国土交通省の養浜工事の進展により、沖合 200mの取水口付近の海底面の上昇が経年的に進行していると思われ、平成 26 年度はその症状が顕著であったため、平成 27 年度に取水口先端部の 60cm 嵩上げ工事を行った。ある程度の効果はあったものの一時的な対策であり、近年の着砂の状況から推測すると数年の措置である。さらに、平成 28 年は恒久対策に向け、その前段の応急的措置である取水管 200m延長の調査・設計を行なうための予算措置がされた。危機的状況を回避するため段階的に対策を講じているが、取水設備は水族館の生命線である海水を調達するための重要な設備であり、早急に取水設備の恒久的な改修をするよう市にはたらきかけていきたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムやひれあし類解説など体験型プログラムを充実させている。また、秋期から冬期にかけての閑散期には「育成室ガイド」や「ハンズ・オンガイド」などを実施した。

平成２７年度はイルカ問題について、飼育・展示している新潟市水族館が注目された。WAZA（世界動物園

水族館協会）から、和歌山県太地町でのイルカ追い込み漁の残酷性とそのイルカを水族館が入手していることを理由として JAZA（日本動物園水族館協会）が一時資格停止となり、今後除名処分すると通告された。JAZA は、全会員による投票の結果を受けて、WAZA への残留と追い込み漁からのイルカ入手禁止を決定し、WAZA へ通知した。太地町は国内でのハンドウイルカの唯一の供給元であるため、当面イルカ入手が困難となった。今後は、国内での繁殖技術の向上に向け、JAZA や飼育水族館と協議しながら様々な可能性を探っていかなければならない。

新財団設立については、一般財団法人立ち上げ及びその後の公益財団移行に向け新潟市と打合せを重ね、協力しながら行なった。「文化」を柱に財団設立を進める中、設立目的や設立後の事業など新潟県への提出資料について協力を行なった。平成 28 年 3 月に「一般財団法人海洋河川文化財団」として登記が完了し、事実上設立された。平成 28 年度は公益財団法人移行の申請し、平成 29 年度は公社とのコンソーシアムによる水族館運営を平成 30 年度末まで継続し、平成 31 年度以降は新財団単独による管理、運営を行なう予定である。

平成 26 年リニューアルオープンした鶴岡市立加茂水族館や北陸新幹線の開通、平成 27 年オープンした仙台うみの杜水族館、さらに今後リニューアルオープンが予定されている上越市立水族博物館など、他園館や県外への観光客の流失が考えられる中、新潟市水族館のさらなる魅力づくり目指し「水族館業務を行う専門家集団」として平成 2 年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、新財団設立後も多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。